

多様性と自分事

長谷川 哲子 教授

(日本語教育学)

今日のチャペル講話を聴きにきてくれたみなさんは、「Kwanseiコンピテンシー」というものを聞いたことがあるでしょうか。「キリスト教主義に基づく全人教育によって「Mastery for Service」を体現する世界市民」を育成すること、その実現に向けて、すべての学生が卒業時に学部の区別なく共通に身に付けるべき知識・能力・資質」として、大学HPにも掲載されています。具体的には、知識、能力、資質のそれぞれについて、たとえば、「多様性の理解」「主体的に行動する力」「よりよい社会に変革する情熱」等が挙げられています。今日私がお話したいと思っていることは、こういったことに関わるものです。

いま挙げたようなものをどうやって身につけるのかと思われるかもしれませんが、その一つのヒントとしてヒューマンライブラリーについて簡単にご紹介したいと思います。

ヒューマンライブラリーとは、社会において、マイノリティとみなされがちな人々が語り手となって少人数で対話を行うという活動で、語り手の方1人に対して聞き手は3～4人ぐらいです。図書館というしかけにより、日常生活から切り離されて、個人と個人の対話であるという場を設定します。マイノリティの方のお話や講演会を聞きに行ったことがある方もいらっしゃるでしょう。それと何が違うのでしょうか。語り手はマイノリティの代表として語られるわけではありません。また、1対多ではなく、1対3か4程度で、相互に個人としての対話や理解ができるという点も異なります。この活動は、通念的な偏見や固定観念の低減に効果的であるとされています。多文化社会や多様性に寛容な社会を目指す取り組みであるともいえます。

ヒューマンライブラリーによる偏見低減のプロセスは、次の4段階とされていますⁱ。それは、①カテゴリーの顕現化（前提）、②脱カテゴリー化（個人化）、③上位カテゴリーへの統合、④再カテゴリー化、です。①では、ヒューマンライブラリーの対話開始時に、語り手が「薬物依存症」「難病サバイバー」のようにわかりやすくカテゴライズされ、続く対話を通じて、カテゴライズされた語り手が聞き手にとっての一個人とみなされ（②）、個人として聞き手と同じ人間という認識に至り（③）、最終的には最初のスtereotype化されたカテゴリーではなく、多様な個性の一つとして認められる、というステップですⁱⁱ。

私自身も何回かヒューマンライブラリーに参加するうちに、こういう人ってこうなのかなというような無意識の思い込みやステレオタイプのイメージが自分の中で音を立てるようにはがれ落ちていく思いをしました。それはみなさんにもぜひ体験してほしいところです。また、無意識であることが何をしていることにつながるのかということ意識する機会にもなってほしいと思います。そして、そういう体験を通じて、かつては他人事であったものごとを自分事としてとらえる、そして多様性を持つよりよい社会を目指す行動につなげるということがとても大事だと思っています。

ⁱ 坪井健(2017)「ヒューマンライブラリーから見た異文化間能力ーコンピテンシーを育てる実践の立場からー」『異文化間教育』45, pp.65-77

ⁱⁱ 宮崎聖乃(2023)「「ヒューマンライブラリー」再定義の試み：ナラティブ・アプローチの実践と設定としての「図書館」」『共生学ジャーナル』71, pp.69-88
